

四海祖国考

特42
526

014098-000-4

特42-526

四海祖国考

新居 守村/著

M23

ABB-0363



特42
526

No 4268
27



えれちるに

つぎの梅

思ふと

はの



實は那うりけり

右は伊勢人足代弘訓書のみみて守持たまひたるなりまこと
にさる事なればこの書籍見るよも漢のを覗くよも歌よむ
も文かくにもるをそめたれば去らせまはむくて此は一よ

四海祖國考序

天地のなれりいつるへはまほさるのじままり一國々
もかつくあまつれと神のおとよみあゝろして作り
たまへり一わが國の傳へはいとむたゞくさむある
されどと保き神代のことよ一あればそのつたへはあ
まつゝも世の人のをとりがてよのみすめるを加茂本
居平田とか志とき大人の形れつがひいぞ、望きとと
され一かは今は大方まどふふもあらざめ旅を師翁
のおのを強じおらひ來る四海祖國考ぬれり一とたり
見てはしがさせよとありけるよ今更何をかかき出た
まひけむやくなき事よ老のみこゝろをいためたまふ

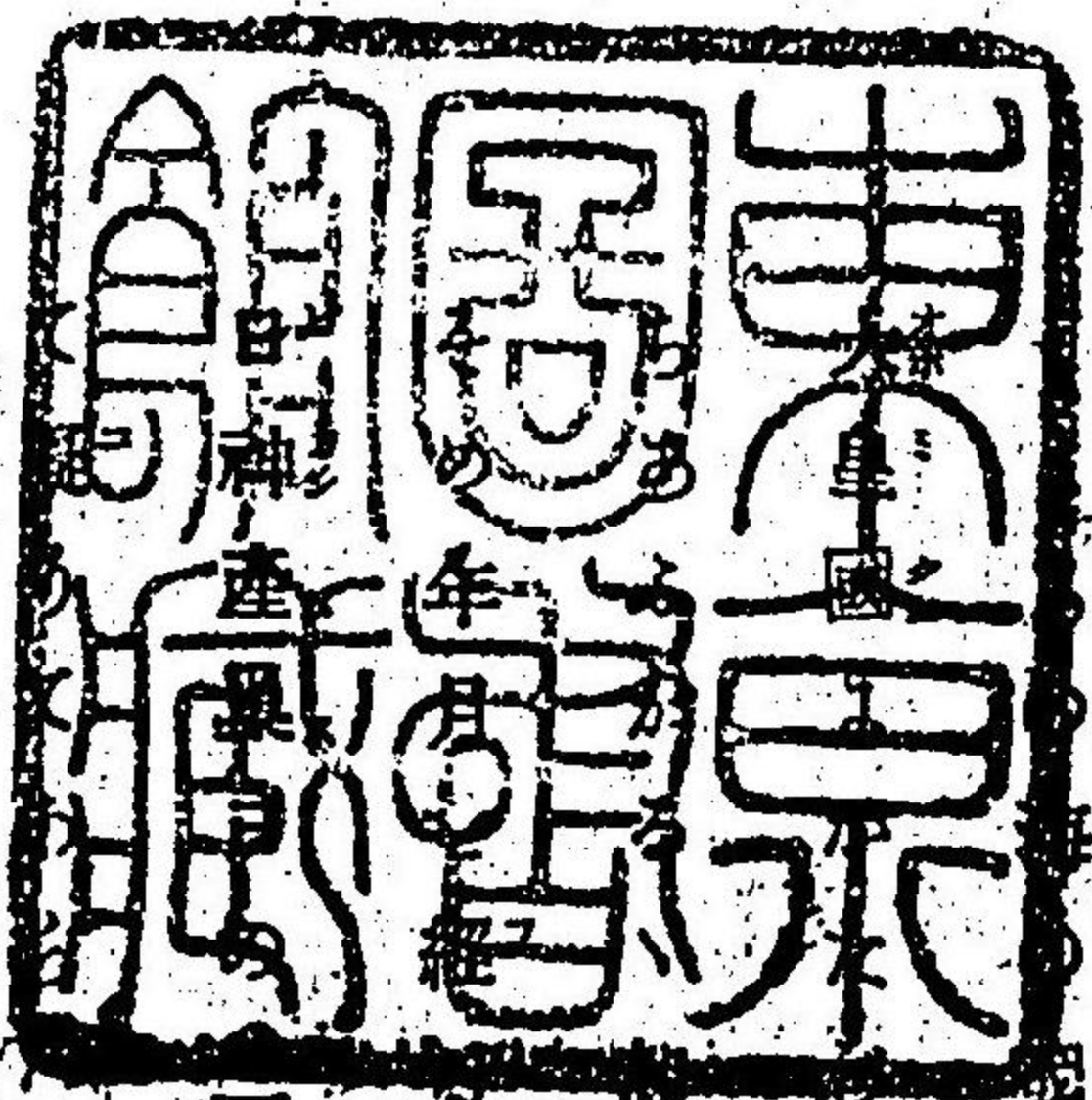
よとうちつぶやき海、見もて行、大人達のおもひも
 かきぬ考のつはらかぬる、たさろかれて尋枝があ、
 ろを人、ゆたぬていたづら、書籍よ受けむことさ、
 いま將くや、うまむさこそい、るよの人をいか、見
 らむまほ、いふか、むふ志、あけ海らひた、せよ、
 なむ翁の本意、はありけるおのれはたふさむあまり
 一か、とまり、おかすたもふま、を

明治廿三年三月

上毛高崎人

田島尋枝

四海祖國考



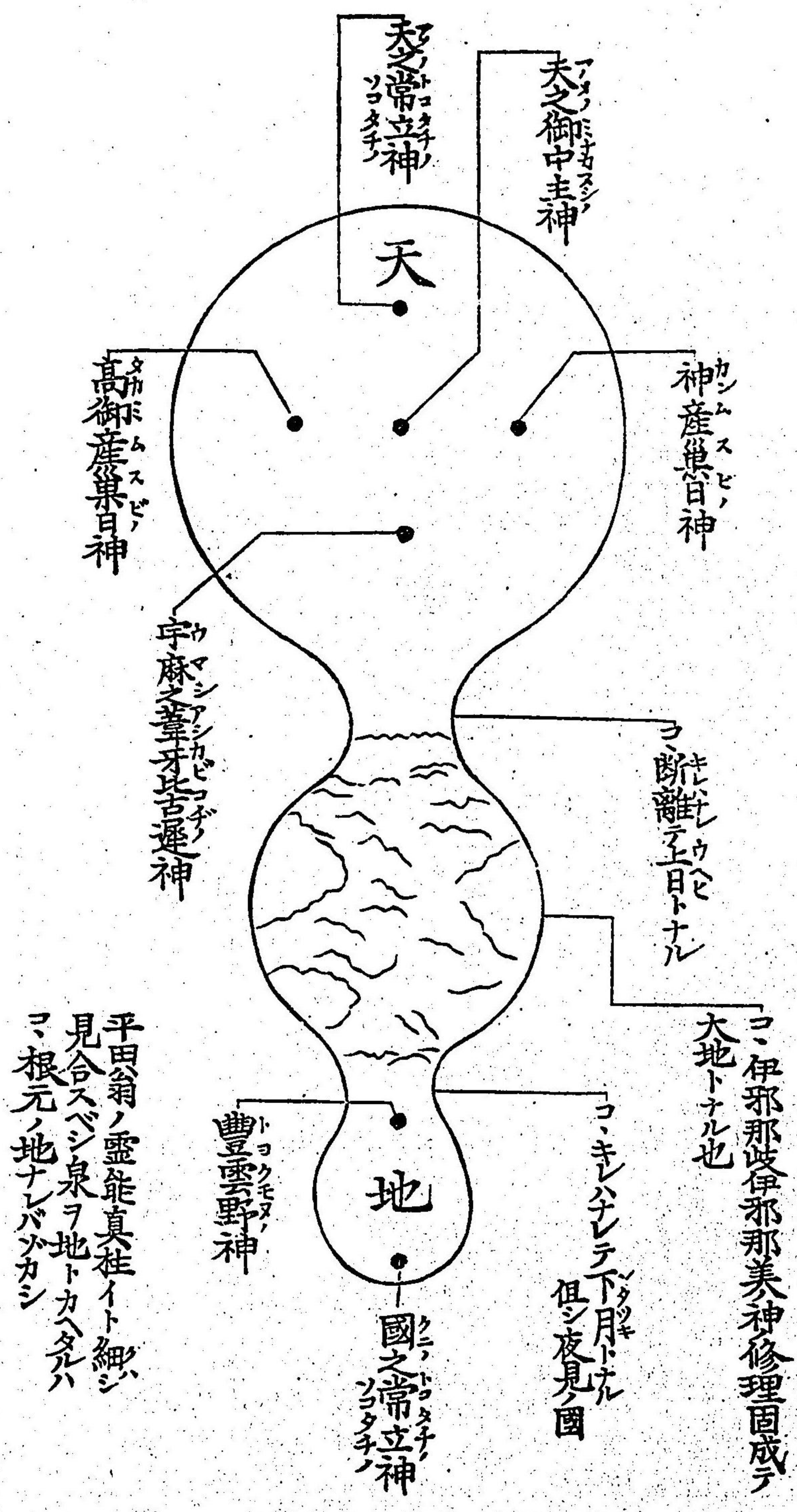
といふ國のおやなれ婆も、とつ傳へのつた、りて見、
 けなくも生れて古學の道、は神代よりの翁たちさう
 茂氏本居氏平田氏のそれ跡に頼てかつ、こゝる得
 ま、よそのかげによりて心づき、天之御中主高御産巢
 一柱の皇神さち、虚空中の氣のまかなるべき時、いたり
 れたまへるなめりと思ひ、悟りけれ、婆氣象考を著述た
 り、本居翁の玉勝問、あられたよ、ひ出たる説は、とみに人のうけひ、かぬ事といへる條の如く、よき人のも
 る、ま、り、あ、れ、婆、わ、れ、ら、の、異、なる、を、聞、て、い、よ、き、あ、し、き、味、ひ、も、見、ず、し、て、譏、ら、れ、捨、ら、る、べ、し、と、思、ひ、ッ、も
 道をおもふ、ま、り、に

又その後考へ得たる事、はあれ、婆人、とらへも、願、す、て、同翁のいへらく、書紀は後
 事を記し、漢國の言を以て皇國の意を記されたる故に、あひかなはざることを多かるを古事記は、いさ、か
 る、さ、か、ま、ら、を、加、へ、す、古、へ、より、云、傳、へ、た、る、ま、に、記、さ、れ、た、れ、婆、の、意、も、事、も、言、も、相、稱、ひ、皆、上、代、代、實
 なり、是、も、い、ら、古、へ、語、言、を、主、と、し、た、る、故、ぞ、か、し、た、と、ひ、か、の、一、書、ど、も、の、中、の、一、ッ、よ、し、て、重、公、の、書、典、に



神皇產靈尊の御
 子少名昆古那神
 やから國の齋民を
 もよかたりさか
 玉ひけむ天地開闢
 陽清爲天陰濁
 爲地又清以陽
 靈氣上爲天濁
 以陰凝爲故氣下
 爲地とも傳へて
 あり思ひ合すべし
 又日爲陽精共
 日爲陰精とも
 月爲陰精とも
 月爲陰精とも
 月爲陰精とも
 月爲陰精とも

はあらずとも用ふべきをまして是は淨御原ノ宮に御宇天皇の厚き大御志より起りてふたゞ平
 城ノ大御代の詔命によりて撰録れたるうへは輕々しき私の書の比まあらずかれこれと思へ婆いよ
 くますすく尊び仰ぐ倍きは此記になむありけるかくいこれたる如く古事記ハ實は正しけれ婆大か
 たこれかの三柱の神の次は國稚如淨脂而久羅下那洲多陀用幣琉之
 時如葦牙因萌騰之物而成神名宇麻志阿斯訶備比古遲神次に天之常
 立神國稚又神の御名などの説は記傳に都きて見るべしタハヨヘル物これ天之常立神
 ハ天地となるべく氣の凝りそめたる一ツのものごと守村は思ふ
 姓氏録に天底立尊とあり言靈の
 ささへにてトと通ふなり
 國之常立神次は豐雲野神この國之常立神
 なるる事もまらる我國の古へ傳へはあほらかなれどもモエアガルとい
 へるにて自然にシメル事いえてきこゆ此天は日なり此地はされえな
 れて月となるさるから天に凝りなれる氣の質ハ火
 疑りなれる氣の質ハ水
 同翁の説にハかくいふとあやふまむ人ハともし火
 平田翁の説は地
 又たがハす
 書紀ノ一書に國
 の名よて地ハ
 底立尊とあり



使ノ字ツカニセリ
とハ和泉國堺人
小田清雄主の教
へによりて

もちて下て見よさげても上水ハ都きあげても下るなり氣あるが中に
火水の氣いとあやしされ婆先天地となれるに、なむ

此、天地あひ高御産巢日神産巢日ノ神のつくり給へるなりける其は書
紀ノ顯宗、卷に三年春二月阿閉臣事代使于任那月、神若人謂曰我祖高皇
産靈有預銘造天地之功宜以民地奉我月神若依請獻我當福慶
事代由是還京具奏奉以歌荒樺田在葛野郡壹岐縣主先祖押見宿稱

佳祠云々 預ノ字本居翁はアヒとよまれ平田翁は字になづまでよまれたれど應神紀にアラカ
見の字をあらぬわれなれ婆いかによむべきかと田島尋枝よ

とひ見しにカチテとよむじよかるべきといへるにまかせて 夏四月日、神若人謂阿閉ノ

臣事代曰以般余田獻我祖高皇産靈事代使奏依神乞獻田四十町
對馬直侍祠 此の御託宣に天地を造りたまへる御功のなきは月の神の御言よ讓て省たる

生ませる五柱の神をさへ省き漢籍めかさむと國常立尊よりものしたまへる其御心
ながら一書をもを加へさせたるはうれしともうれし神やまもらせたまひけむかし かばうり

から國の傳へよ
有五大生一
太易大初大始太素
大極ナリこの五氣
の通運を天地の元
といへり思ふべし

も天地のなりそめたる正しき傳へのあるは天の下ありとある國々嶋
々の祖國なれ婆ありけり素問の方宜論に東方之域天地之所始生也と
も見ゆれ婆外國籍に相率る人たちもうくいふとよそにさかで實に祖
國と尊むべき事を天地はじめの時高天原よなりませる神たちと上件
五柱神者別天神と傳へてあり 本居翁は天上に成坐るをば別なる神として分たるものな
此五柱の神を容さたるによればげよさる事 といこれたり神代紀に國之常立神を最初の神として
と一わたりとおもひるれをまかよとあらじ づら／＼考ふるに天神と地神とわく
にもせよ天のそじめ成坐て異にかとします故に別天神との御傳へ
なるべしと思ひつきたりまかるが上は老て子どもにかへれりと笑ば
目らへ譏婆そしれいひあらはさでやあるべ死此五柱の神は虚空中に
自然にまかなるべき氣の凝りて天地よりも先よなりませれば氣とい
ふ氣の元祖よて氣を去りたまふ事はもとよりにて此五氣のいみじき
事のなごりを今の現に見せたまふをいでや我身よりいとむ父母の氣

に別天神たちの五氣をかりてされ、ば左よ

神産巢日神耳

神産巢日神無名指

又この傳へには
あらねど鼻を人之
胚胎、鼻先受形、
故に鼻祖、鼻祖
祖と見延たり心
あらむ人の心もへ

天之常立神額 天之御中主神鼻

宇麻志
葦牙比
古遲神

天之常立神 食指

天之
御中
主神

中指

小指

宇麻志
葦牙比
古遲神

高御産巢日神耳

高御産巢日神太指

此ハ中指ヲ掌
ニオシテ
見ツベシ

神産巢日御祖命
の我手候云々との
たまへる事あり此
神は五氣の調へぬ
先なりこの御手は
といふかむ人もあ
らむか此は天をつ
くりたまへる神に
おのしませ婆五氣
のきざし自然あら
るかゝる事あら
じとおもへ

かくもれせるを見たらむには天之御中主ノ神の高祖にかゝりしす事
よりして五氣のあやししくかこしき事の目にもさやうも見ゆべしとぞ
おもふ 此頃、頃、死體、死體、見たりけにひさわく人はあれど鼻の高き中指の長さ 指は
をいまだいかにともいひたる事をさかす清言又燈臺本くらしともわらふべし
五氣のことよさきへあるにやあらむ正しき法則あり大指を祖父君
として臥たまへとをり次々祖父母次々我も臥ますとをり又母君起

ますと子指をおこしつぎへにおこして見つべし 君臣の道もかくの如しとまゐる
爲長といへ 此法則之神なからの道なれば漢籍佛書に如きつくりもの

ハ教へよあらざればいかなる人よてもいなどかかしらふりうたからむ

我友齋藤多須久説教のをりく五本の指折てわらへどもにをしへたりとさうべなり猶いとむわ
があたりよて大指を家あるじとし小指を妻として大指を見せ又小指を見する事あり家あるじにた
とふる大指を妻とありあるべき事はさるものよて小指にも妻とありければ贈ふとくもきりたしされ
ば人妻になりたりむには妻とありなくてはならぬなりけりとたをやめども守村もさすなり今お
もへば三十年もや越後人いへらく人の妻になりて身もちあしければ友とせぬ國はならしなりと
いへり神ながらの小指の妻とありて失ふ女なればよきならしこの國なりけり今もみちならぬ事あれば
なかつたものに身のおきとこるなきまでいやまるとかいとよき事なり山の
奥野の末のけて男女すまむのきりはいりてこのならしよせまほしきものぞ 指は五柱の

神のさきへありて大指よりヒョウミョウと折屈めまかど握り開きな
がらふきはらへば疫をうくる事なしあやしともあやしかしこしとも
かしこしかくをしへかくを心あらむ人はよくおぼへ居てあしき氣に
命とらるゝ事なかれ 復古八卦方位辨禁厭事いへりいでや言葉のさきへふ
此す系にも情事きものぞ

國言靈のたすくる國といひつぎかたりつぎ來ぬれば猶五十音もてい
とひ 實は五十五にておもひおもひおもふおもふなご言の下の一行にまたもふ
のり行にうよふ音はありつ、も文字なければ五十音といひ來し

神産巢日神

喉本音ア舌中音イ唇中音ウ

これ三音がはじめにて

天之常立神才天之御中主神 ア

宇麻志葦牙比古遲神

舌末音ク唇末音オ

イ

高御産巢日神

これより

カキナハマヤラツレ九行
となり万聲となる五柱ノ神の元
氣にて万神万物をなすが如し

こは身の氣に五柱ノ神の氣のそはりてなる音なれば元氣に凝りて五柱ノ神
となりませる如くア。イ。ウ。の三音最初よて次よくオ。の二音いかにくす
しからずや 富士谷氏の北邊隨筆に五十音の本源を。ハ音と説るより其尾にすがりてあらぬ頭
をそへなごしてこらたくいへる人もありなごかられそ本源喉よてアと呼び舌に觸る

、如くすればイとなり唇を動す如くすればウとなりかくてエ

はイの末音オはウの末音と心得てたらざる事なしと云るべし 何々といえむと氣が凝れ

ばいづる息喉舌唇牙齒の五所よ觸れて詞をなしとこれに辞をひて自他

のたがひなくものいひわかたる、は別天神の五氣のさちひたすく

る故とぞればゆる五柱神の氣身の思よそへばやがて氣神なり 神なしと

人のいふをきいて得るみツ、わがよめる我思ももの かゝるを筆とりて物かけば氣

いはわりつささへとれもへばやがて神よぞありける

はなるれば自他をたがふる事あり ついでよ心うべき事あればいはむ天下はたごへば

りよて五氣のなごりもあれは異國人とても鼻高く中指も長くてかゝる事はなしされ紙よ灘村のあ

るが如くにてよきあしきありそのよき所が我神國なれば氣のよき事はいふもさらなり人の喰米も万

國に抜てよきなりされば息もすくれてよきが上に神のみ氣もそへば物よくいひわかたる、なりけり

異國はそれあしき所なれば氣も喰物もほしければ音聲も輕重もあれど鳥獸の如くにてたゞ其趣のみ

の別ち也神國は辞とひ其姿さたかよわかたる人のかたち同じけれ言語の精しきと精しからぬとに

て國のよきあしきをも早く見るぞよき實に言靈のささひひたすくる國にてかたじけなし此神國に
生れつ、言語の千々にかよひ方にうつるふわやしくすしく妙なる事をえらぬは耻をえらぬ人の一
町にねくべしいさ、かも心わらむ人の言語をやりわつめ見また百人一首の類句なりともこゝろみに

ものして見よ音の上にも中下にも定り
も露みたる事なきぞか一猶もいへればよく思へ

皇國は口のうちにさへ神ありて
詞とはたらうし辞をいひつゞけさせ音も輕重ともわらせたまふを深
く尊み朝よひよ詞を辞を假字と大事よれもひ氣とこらし居て筆とら
むよハ大かたかきたがふる事はあらじうし

われ岩鼻縣をりし時兒玉環の物語に相生山へ行道よて年頃四十ばかりのけしうもあらぬ女のあ
へり供なる者れまり人なりき今きくツツリといへるといづくよかどへば足利の事といふに驚くれ
さりといへるよかの極熱の草藥を腹してのさうしら人も思ひ出されてうち笑ひぬ今の帽をかぶりだ
る若人たち大かた前橋をセンケウ高崎をカウキ板鼻をハンビと呼び又一とニーン二をテエー三をチ
ー四をヒール五をヘインとて呼びて學者めかすなり口の氣あらびてあるまじき事よ變りて筆はし
らせなばかたいらいたき事のみおはるるべし心あらむ
人のこゝれ詞の尊き事をしりて心すべき事なりうし
こゝの言を加茂翁は神祖の教

へ賜ひし言にて
五氣よ心用ぬあらざり
他國にはあらぬことなりと實よさ
る事ぞさて氣はいつれの國よもみちてあるをと思ふ人もあらむ天地
をつくりたまへる産靈二神のはもとよりにて外三柱のもそひてある

事は論までもなし此翁は我國を日のいつる國といひ平田翁は天の斷
離れたる葦のところといへれば四海の上國まして神祖のみこともち
て伊邪那岐伊邪那美二柱のつくりかためたまひ天照大御神はあれま
せる國この大御神の吾子孫可王之地也と宣たまひし如く天津高御座
にましまそ事今にかへらせたまぬ國なれば本居翁は天地のそきへ
のきはみまきぬともみ國にましてよき國あらめやとよまれたり異國
を思ひ見るに王の女ともすぢなき男よわはせ賤奴の女も后になり
ほり貴賤品さだまらず鳥獸すら鷹と鴟と熊と狐と交はぬにも耻ざる
潮沫の凝なれる異國とは其差別大にして氣も異なるうへに神祖たち
の氣もことよそへれば詞よ辞そひていとさだういひわかたるれば
それあらむひそれうまみいひしらすり
活語には將然言連用言截斷言連体言已
然言れ五轉あり此も先五なりあやし
これよりいひつゞくる辞格あり此五轉は師妙玄大徳の考へて定められたるあり此頃はその跡によ

加茂翁の此説を本居翁も捨たればいふかもしむ人もあふべければ平田翁の説すかりて考ふるに天竺にて天地世界を創造せる梵天王ハ我國の皇産靈大神にれいしまたして音聲ハ喉本のア最初にて舌のイ唇のウ根元云々ををしへたかせ玉へるよりて梵字を作りやがて梵天王のといひなしたりかいは五十音を悉曇字母によりてと思ふもうべなれどふかく考へ見よ神祖のあつめなしものといふぞ正しかるべき

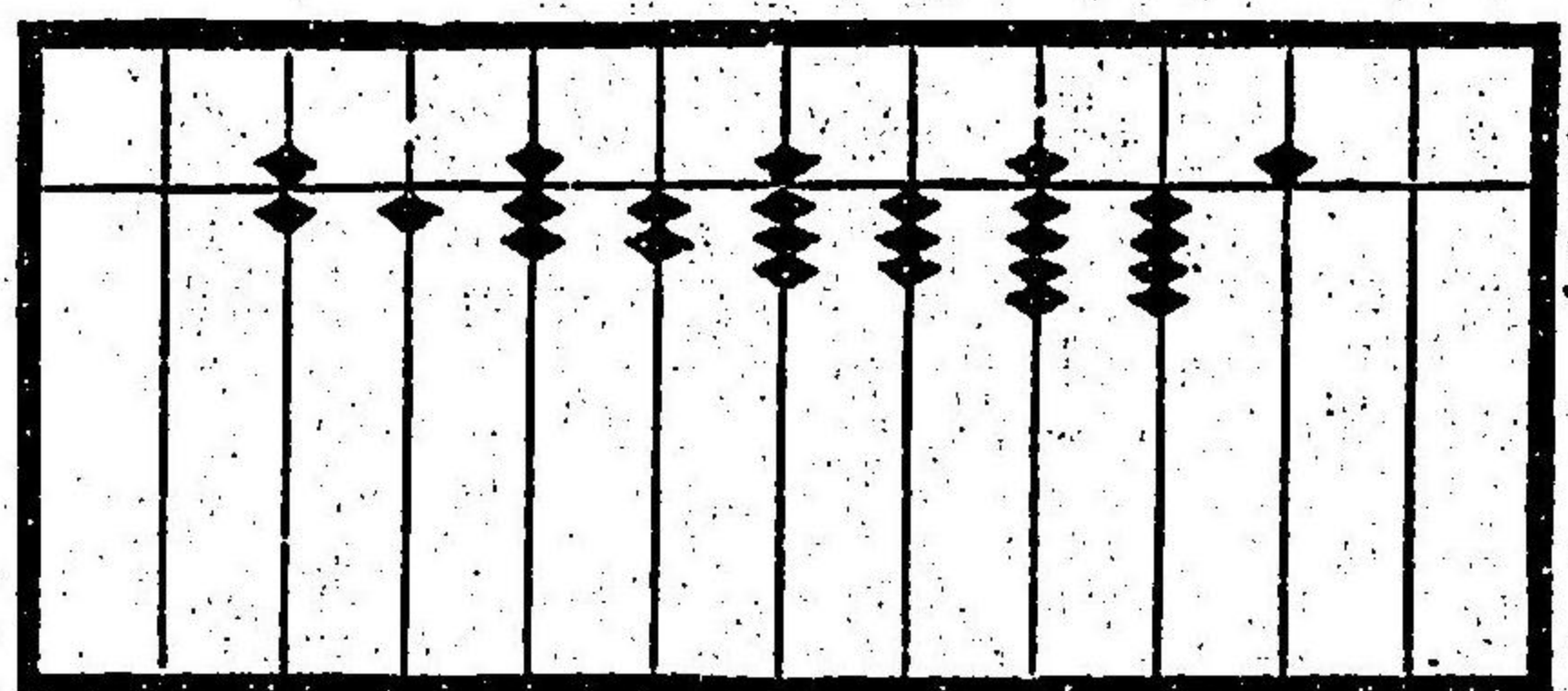
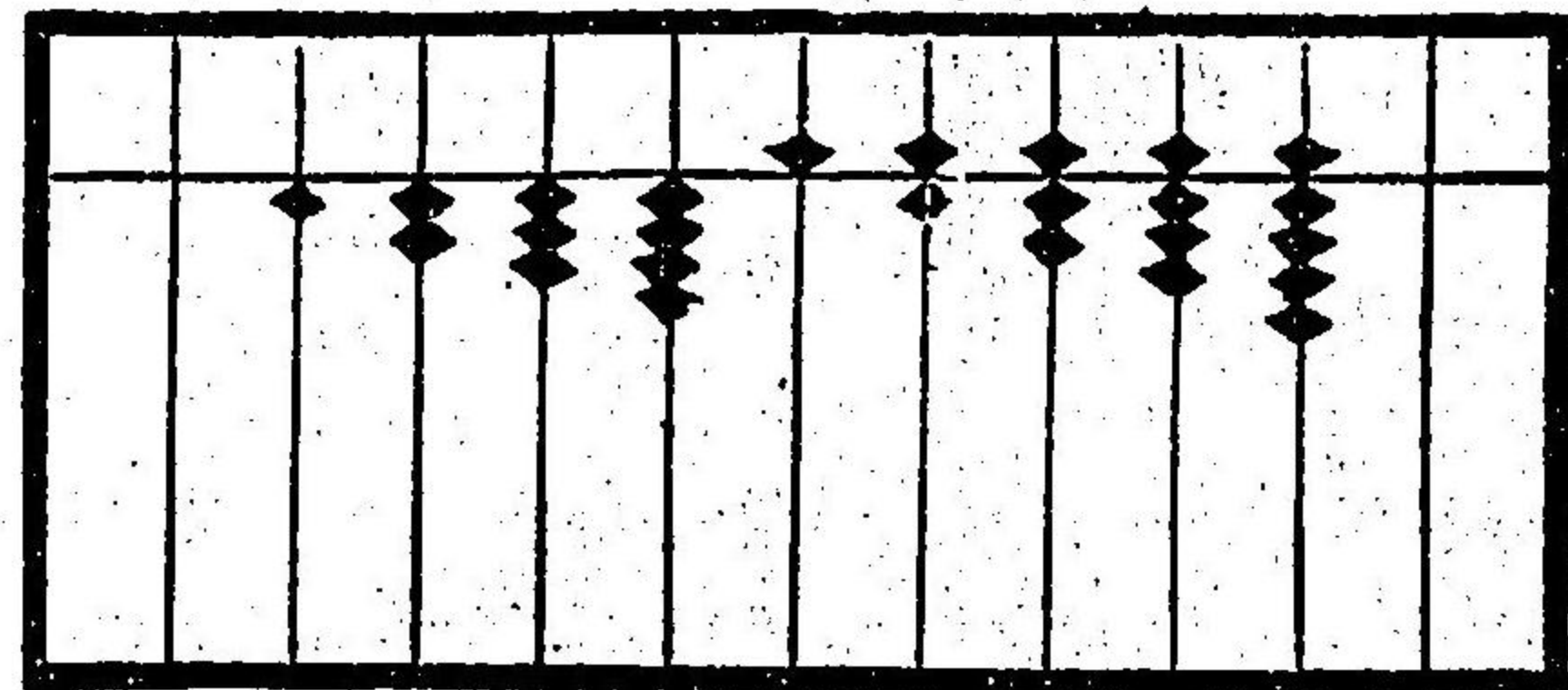
り、その事とまりたりげに種々の道をつくりだしくして初學のふみまをふつらひとなるべき書籍ともこれかれと見も師の御靈天かけりみそなはしてさこそおげきたまふらめとれもひやらるさやかにわかる、事をこまかよまらむは五十連音の經緯のすぢくよ引よせつ、辞をいひつ、け考へ見てささるぞよき此五十連の音ハ神祖のあつめなしものご加茂翁のいはれたるぞよき實よいかなる人のちかちよかたもひはかこれ翁のいへらく阿と於ハ言の下にいふ事なし其利留禮呂ハ言の上にいふ事なし言の始めを濁る事なしといへりあらきをしへなれどいとめでたし皇國ハ氏がら家がら高うきみじかきあるべき証しに人の口よりいづる音のた延まなければ神祖ハ氣とそへさせたまひてアイウエオハ言の中下につく事あらぬなるべしたとへばアハか外は親ラリルレロハ言の上に居る事なしたとへば舌の末もすゑの音ガキグ王たちも言の上よ居る事なしたとへばカキクケコハ分音なればいやし守村万葉集

句々早見をものして加茂翁の早くをしへられたる事ハ身にまみてげに本居翁の師なりけりと思ひやられけり我はまらねど人にきくはそなえりといひてすまふ人もありどか尊む神を濁音よコトとらふにてもさる學者よあひまじこりて言の字音と唇のなりて言語あらぬさまならざらむやうにふかく心用わそべき事をぞれもふいよくますく思ふよ歌はうたふ物故に別天つ神の五氣そつるべければ初句五言がよきにこそ歌のはじめはうの阿那邇夜志愛遠登古衰どのりたまへる古今集序に此歌天地のひらけ始まりける時より出来よけり古實よ五言二句の歌なるべし又かの十寶を布瑠部由良由良止布瑠部の一三四五六七八九十もヒフミヨイムナヤコトと五言二句のまらべなるべし我はかくれもへど人はいかならむかどまれかくまれ歌よむ人よ五言七言のはよきまらべなる事をまらざるはなかるべし本居翁れいへらく大方五言七言よとどのひさるが古今雅俗にわたりてはよきなりされば昔しの歌されど何也えに五言と七言とが得よきなり也えよしをいへる人ハきりざりけり七言のよき

は五氣に豊雲野神國之常立神の二氣そはればなるべし産靈れ神の天地つくらまゝ時のその氣その神たちの數なればその尊き事よく考へ見なばわきまへまらるべし
他國の時も五言七言なり され復古八卦方位辨著し、慶應元年頃の上件五柱神、別天神の御傳へよ心いたらざりければ伏羲氏王天下也仰則觀象於天俯則觀法於地云々此は天に五星地に五嶽なりけりざるを八卦は漢名伏羲氏わが國の大名持命れつくりたまへる事に論さだめむとこの古傳ども尋ね骨折たれど今れもへば天は五柱の神にてなりとのひ早く斷離ていく万世をかへにけむまかれバ産靈神のみばかりよて
天地をつくりたまへれば 曆をつくらせたまふ天のなり調へる氣

暑氣 元氣 寒氣
 冷氣 暖氣

この五を算とりもちて中よかきて四桁さきに一をれきその一を五に加ふとて五の石に六をれき又二をれきその二を五に加ふとて六の石よ七をれきつぎてまかすれば算もていへば心得やすければなり
 かく一の段 これを二に割れば かく二の段



- コノ五八天數白コシテ真中ノ玉モノ
- コノ九モ天數ナレバ白ニシテ西秋
- コノ三モ天數ナレバ白 東春
- コノ七モ天數ナレバ白 南夏
- コノ一モ天數ナレバ白 北冬

これを圖すれば漢國の河圖なり左を見つべし

この下の圖ハ神祖
産靈の大神のつ
りたまへる暦法な
りよふき奉らる
ゝによりてうれし
き事あればこゝに
明治廿二年一月九
日古物屋にて氣の
たちたる古掛物目
に掛りければそ
れハ今問ふ結の書
なりと今年之年の
御神にさしげざり
ければ何神かこれ
をどのをしへなら
むどもとめ來て年
神のおまへに子ら
がうちながめて結
五ツ青麥二本その
葉も五ツその種の
實十七ツ、船のう
たちにてゆくさま
なりぬいきてる
るが如し書師の名
は舟泉隆正とあり
といふよしありけ
れと思ひッ、もよ

これなる廿四氣の一氣の日數十五は正といふべく十六十四は變といふべき一氣の日數其比

一年に 十五ハ 十四より十七

十六ハ 六より八

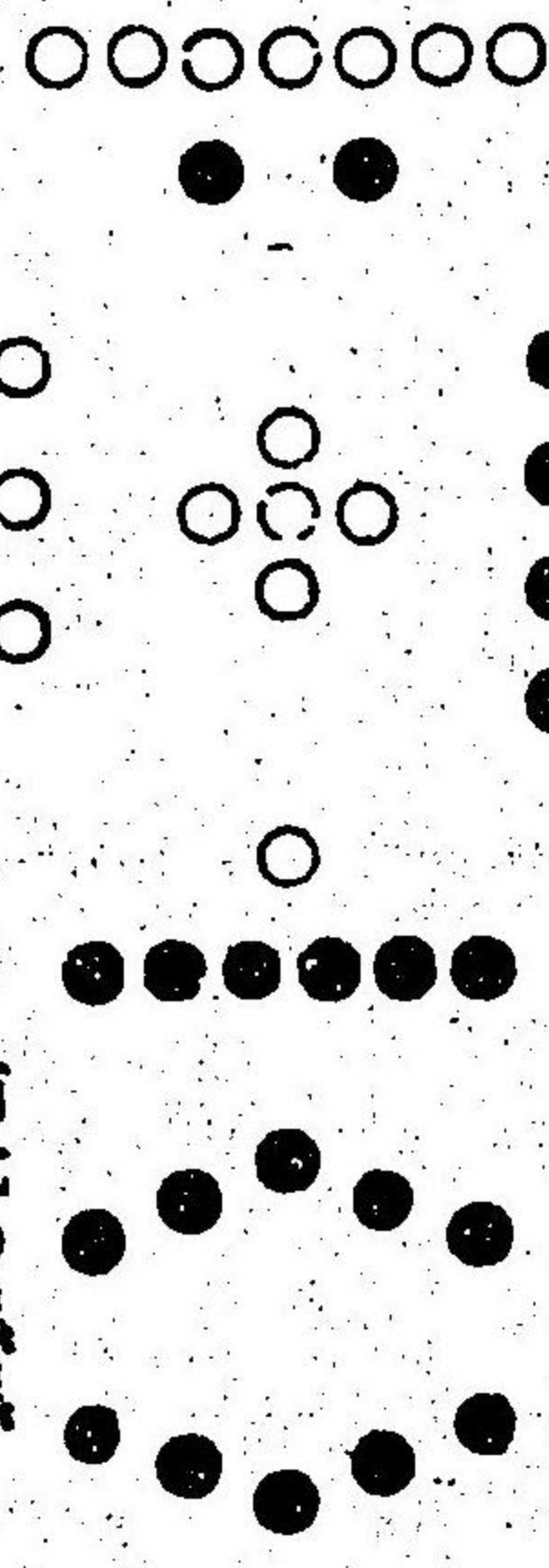
比は 改りノ正しくなりたる暦によりていふなり神代のは八氣なりけむかくて十二氣となり又廿四氣とくしくなりけむどおしとらる

南西の白白
合て十六
これも一氣の日數

東西の白合て
十二これ十二月の數

西北の白黒合て
十五

南北の白白
よて八
これ八節の數
廿四氣の本



南北の黒黒
よて八

東南の外の黒白
合て十五

東西の黒合て
十二

北東の黒黒合て
十四これも一氣の日數

半月の日數又
廿四氣一氣の日數

外轉三十あり 一月の日數 又古曆十二氣の一氣の日數
内轉十あり 上旬中旬下旬
この内外の五を加ふれば
物數四十五此は八節の一氣

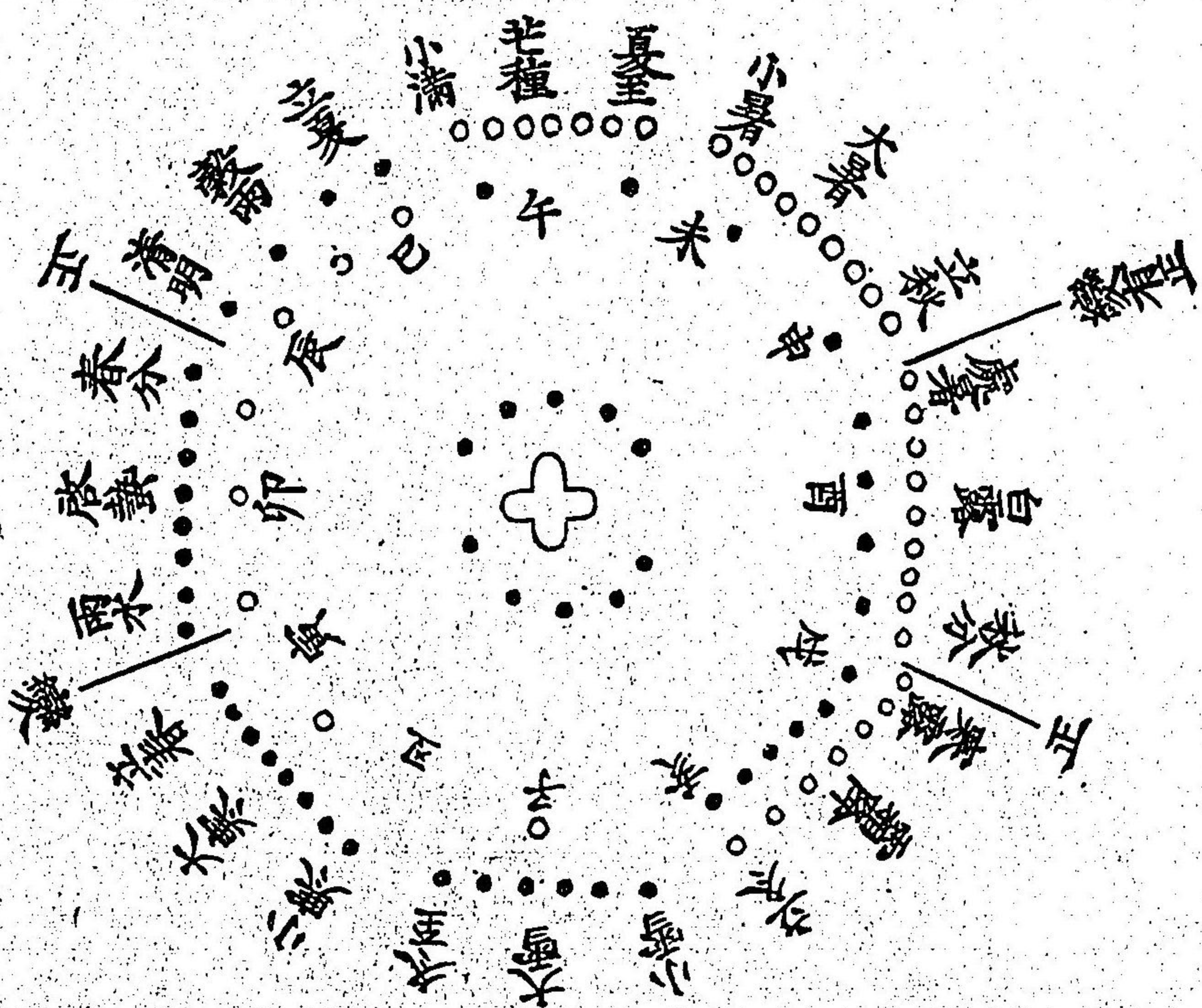
この黒れ十數ハ真中の五の回りにあるを算になければかくものせるなりこれなむ太極なるかの圖に聖人老う老らざりけむまをひていひさしけりそれを尊む驚才の學者のみなれば禮記月令中央土のどころに其數五とせる大誤りをいひやぶるハなく強ていひたすくる人のありけりかれば漢籍は心してこそ

考へざる故に俄
に死ぬかどきため
られて接ひ見るに
すべての數四十六
一葉に之をせむハ
十葉に之をせむハ
はやくてなるべし此
法漢國よて河出
龍圖の傳へを空
言ぞと結もて河を
おもてわたりその
よて易をつくれ
と書がけるのみ
周易の片羽筮に
かられて正しき書
數の四十五の先哲
なかりつるをえれ
る人うなかる書
たぐみもとうちか
どろかされて心せ
君ハ神也それの書
をみゆに見つれば
み谷めもとうべと
ぬたひて御酒奉り
ぬさて舟泉といふ

かくものせさせて其角々を補たまふをその圖のさまに真中に五をす
ゑおきたまひッ、實は十にて一ひきてそを北とし九を南に三ひきて
そを東とし七を西に次に二を西南よ八を東北に四を東南に六を西北に
これなむかしこよて洛書といへる圖なる
則下に見ざるが 此之角々をむねにてつくらせ
たまへれば角のはそのまゝおきて左めく
りよ一を八の下にうごかし三と四の下に
次に九を二の上に七と六の上よ重ねて二
圖合せて一圖を作りて見しよ暖氣暑氣よ
なりゆくさま冷氣寒氣よなり來るさま黒
白の數の多少にていちえらく一年の日數
も問のあるべき數も甲子れ數も一節の歲數も考へえられてあやし右

姓氏の思ひ出すも
 しは舟出見のこ
 ろにてまかせるよ
 やどさへおもはる
 万国の祖國なれば
 めづらしき古掛物
 もあらはれてわが
 考へのたすけにも
 なる事よ

の二圖をかしこにて驚才
 の學者たち龍馬の河々出
 し神龜の洛より出したリ
 とあやしきいひさわける
 のみにて二圖合すべきも
 のとまらずこゝのも驚才
 の學者にあひまじこりて
 まれる人いなりけりさ
 るを守村考へ得て復古八
 卦方位辨を著していへり
 されど合圖をまらぬ人か
 得かるべければかく下に



ものして見すこゝろしてよゝ見ておもへついでに[○]を除きおきて[○]
 ての數に二圖の異中なる五を合せて白き字形に作れる十を加へてか
 きかぞうれば九十なり是に四時の四を乗すれば三百六十則一周の日
 數なり又外のをかぞふれば五十八なり是に二時の月數は六を乗すれ
 ば三百四十八やがて閏月をおくべきに當るなり
 ふと見なば此數あやぶむ人も
 たらねばその六を加へて見つべし三百五十四日とあるなり
 又内轉のをかぞふれば二十二
 すなはち甲子の十と十二との數なり是に一時の月數なる三を乗して
 白字の十を加ふれば七十六あやしきも一節の歲數も當る
 猶いは正の一
 めぐりに黒白白白とかぞへても又白黒黒黒とかぞへても廿九なればあり變^二有^一正の繩は左め
 ぐりに白黒黒とかぞふれば三十又變より黒黒白白と數ふれば廿八なるからにまかせざるなり
 しともくすし平田翁一節の事はいへれど歲數のおこりはいはすまら
 ざりけむ
 復古八卦方位辨にくわしくいへればこゝには大かたをいふあり方位辨よつきて見るべ
 し此本今はもとめむに書林よあらじこの板東京芝神明前岡田屋嘉七に易故新のをも活
 語指南のをもそへて預けおきつるに家を藏をも賣りあるじの行方もま
 れねばいふはせむとくうちなげかるたれ人かあるらむ
 上にいへる如く神祖

産靈の大神のつくりたまへる暦法とぞわふぎ奉らる、天地とつくりたまへる大神さればこそいかなる神の神之かりよか此二國漢神代紀に生姪兒三歳脚猶不立と見延鏡火人のあやしきいひ傳へたるうべ祭祝詞夜七夜晝七日と伊邪那美神のたまへる事もあればなりかの神祖三柱神の産靈の御徳より深在中よりも延あられる物運て今の現よも延見るよ左にめくるなりととく斷離れ天となれば春氣來れば夏氣にうつり秋氣來れば冬氣よなる一周も又日あらはるれば夜がくれ夜あらはるれば日がくる、めぐりも自然にありけむかし天地の回と今見る如く神祖産靈とたり此暦法圖を大國主ノ神大國主神漢名伏羲氏よかはします事は赤縣州へ持たせたまひて暦法をたしへたまひ且はこの圖によりて八卦をつくらせたまへればかの國の姦民ともうちれどろき尊ぶあまりに河出龍圖雄出龜書といひ繼つ、聖王の奇瑞と傳へたれば本居翁の聖人と人はいへども聖人のたぐひならめや孔子はよき人とよまれたる孔丘す

らわが道の行ハれず願みなさよ河不出圖と歎きてあり算の二の段が毛まきよある馬の河より出たりとおもへるかな五星五岳もことごとくいひてあれど天のなりとへのへる別天神のいみじき功德の名残にて五星五岳もなれるならむと見てたりぬべしつらく接ふに驚才に姦民をもよさすとすにはつくりまうけてござかしくをしへねば耳に入らぬよや女媧氏鍊五色石以補天また佛令寶應菩薩造日といふ傳へもあるらむ我國は四海の祖なれば大派のおほらかよ傳へてあれどよくあちひひ見ればうましもうまし高皇産靈神のつくらせる天地は日月なりけり服部中府地を泉とせり平田翁もこれにまがへと我はまうらす本居翁のいへらく宇比地爾神より以下八神の御名は伊邪那岐伊邪那美命は御身の漸々に成整ひ坐る趣より負せ奉れる實は伊邪那岐伊邪那美二神なるべしといはれたるいともめでたしかくて天之御中主神よりかきか

ぞへ見れば伊邪那美命まで九神になむおはします祖國なれば皇神たちうくな
り調ふべき事と思ふ漢籍
なれど数は起於一立於三成於五盤於
七處於九といふ傳へ見ゆふべし猶いはむ我は天地を造りたまへる高皇
産靈神の神はかりみはかりもて曆法もつくりたまへりとおもへど兒
三歳になれど脚たゞざり 澁川春海先生は日本長曆の自序より伊弉諾尊測日之
きといふ傳へもあれば 三天雖考春秋定歲時其詳不可得而聞矣云々とあるを平田翁深くおも
ひわが古昔より其事なしとは誣ひがたしと厭まで考へて伊邪那岐大神
の眞曆に大國主神宜しく調し給ひて大御國も遣し給ひ赤縣州をばじ
めうらの國々へも布およぼし給へりといへり澁川先生は赤縣州の諸
曆をよく知り損益して貞享曆はつくれり平田翁は天朝無窮曆を著し
て出羽國へ流沉へりかく聞居れど
實はまらずいづれも扱たる學者の伊邪那岐大神の
曆の造りたまへりといへればそれにまたがひてあるべきをさらし曆
をばえらぬ身よて高皇産靈神のといふひの誰もうべといはざるべ

もえあがるものよよりて天なりやがて斷離れば暖暑冷寒のうつるさまも夜晝の
けれどさまもえろしめし又天沼矛をねもへばとく算もつくりたまひつらむとおしはかりて 別天
神の五數やがて曆算の根元とればもればなりかくいへど人の心面の
如しといへばいづれよても皇神の造りたまへる曆とねもへばよしかく
て高皇産靈神は造りたまへる天地は大地の上下の節よて尊しとも尊
し晝の乾し夜の潤し大地をめぐむ功德いひまらずかし日月の尊き事をた
れ人うまらざるべ
きとは思ひつゝも近頃は日月をランプに如くいひ罵るまれ人もあるかなればかくさすとすなりついで
よいはむ節はいとみじ花瓶は朝顔さゝむ節をつけてさせば去をれれし又薩摩といふ芋蔓に節
をつけきりてその節とうればかるゝ事なしはかなきもの 偕漂蕩へる其中より天之底
すらかゝるよつけてもよくねもへ日月は大地の上下の節ぞ 先天地すな 其跡に残りて大地となるべ
立神次に國之底立神なまませり 先天地すな 其跡に残りて大地となるべ
く漂蕩へる氣の宇比地運と疑りそめ阿夜訶志古泥と疑りくゝて伊邪
那岐神伊邪那美神となりとのひ玉へれば 高皇産靈神皇産靈二柱神の御功德
はありつゝも漂蕩へる氣は男女あり
て二神くゝと疑りそめなりくゝてなりあまる所なりあひざる所もたる二神となりとのひたる正し
き傳へいづれの國にかわるべき今大地に生ひとおふる物もとよりよて石よすら男女あるなり思ふ
べし天神二柱の神にこの漂蕩へる國を修理固なせと詔たまひて天瓊矛

をたまへり此の神はかりみはかりもて天瓊子をたまひ國柱とつき伊邪那岐伊邪那美命天浮橋にたゝして神たち昇降かよひせたまふ空の路其矛を指下して書たまふは漸々凝りて引上たまふ矛末より垂落潮つもりて淡能基呂島なれり其島は天降まして天之御柱を見たと殿造りには事とりわきて柱をいへり其のたぢなれば中柱は天之三柱とたゞへつべきなり古説は天神所賜瓊矛既探得殿取盧嶋里即以其矛衝立此島爲國柱也と私記に見ゆ是も捨がたき傳へなり古館常陽がいへらく殿を鍋に入て酒香せむとするは飛出むとす其時鍋の中に箸を柱とおしたつればみなそれによりて八尋殿を見飛ひ出すといへり今のうッ、にのゝるにても古傳はふりく考ふべき事とぞれもふ

たてたまひて伊邪那美命に汝身はいかになれると問ひたまへば吾身はなりくてなりあはざる處一處ありとまをしたたまひき伊邪那岐命のりたまひつらく我身の成くてなり餘れる處一處ありこの吾身の成餘れる處を汝身のなり合ざる處に刺塞きて國土うみなさむと思ふにいうにどのりたまへば伊邪那美命然よけむとまをしたたまひき伊邪那岐命然らば吾と汝と此天之御柱をさきめぐりあひて美斗能まぐらひせ

むとれりたまひさかくいひ約て則汝の右より廻りあへ吾の左より廻りあひむどのりたまひ約をへて廻ます時伊邪那美命先づなまやしえをそこをどのりたまひ後に伊邪那岐命あなになやしえをとめをどのりたまひされのくのりたまひをへて後其妹は女人を先言て不良どのりたまひき然れども久美度と興して子蛭子をうみたまひき此子は葦船に入て流しすてつ次は淡嶋をうみたまひき是亦子の例は入らず此御傳の二神は御言問ひを今うけたまはるが如し言靈けさきひ故にこそついでにいひ伊邪那美命は惡氣あひまじりてなりたまへるか男よことさきたちたまへりかくことさきたちたまへる大神女の先祖にねせしませば女さかしうて牛うれぬと

於是二柱神議云今吾所生之子不良いん藤もあるなるべし心あらむ女はよくれも

猶宜白天神之御所一即共參上請天神之命爾天神之命以布斗麻邇爾卜相而詔之因二女先言而不良亦還降改言書紀の一書よもかくさまは傳へてありいとかたしけなき御傳へになむ伊邪那岐命女をことさきだちしよよりて不良どのりたまひつゝもみあひまして蛭子淡島をなしまし

たれぞさかしこささきだちしよよりてとはのたまひすかく心のまづめ天の
神のみもとにまをすべしとて共よまゐのほりてみけしきたまひる天
つ神よもとみにはさかり兼たまひて布斗麻邇さまく説のわれにさまく説のわれを大田なるべしうらへて
のみさとしうしこしどもかしこし此大地にありて玉にも何よもまざる寶は子
なりその子をうる根元の交合なれば大事にも大事なればしめさせて
うらへたまひてなりいなる國よるかゝるまことの傳へのあるべきよ
くれもひ奉るべきみ傳へど儒者佛者よ移ひまじりてればにな見そ
かの互タカは相賤視生欲想共在屏處爲不淨行コガネシロカネナとか金銀何せむの子寶をう
る交合を不淨行といふより人の見ぬかけにてこのまたぐらに突出た
るをそこのまたぐらの穴にさし入れてともてあそびものよなし不淨
行といふより耶輸が腹が指さしてふくらかになれりと大虚言つきの
釋迦も出たり又かの叔梁紇晩年に顔氏の女よ野合して孔子を生しめ

叔梁紇の早く死せり母その野合を耻て孔子よ父の名を語らすとるか
れば交合とみだる事あまたありぬべし祖國のかしこさみ傳へをれ
もへばいともなげかしき事になむ男になりあまれる女になりあひさ
る處々を祖神のつくらせたる之子に子を生繼すべき爲のれもき道な
れば心のまにまみだりに屏處又野合なすべき事にはあらずかけま
くもかしこくいこまくもゆしけれ一ツいはむ日子番能爾々命
笠沙御前にて麗美木花佐久夜毘賣をみそなひして吾いましよまぐの
ひせむと思ふはいかにとのりたまへば吾父大山津見神申さむと申し
たまひき女はかくあらまやし其父よ乞遣したまひければ大歡びて其姉
石長比賣をそへて机代の物を持しめ奉れり此之天照大御神高皇產靈
神ことよ愛しむ養まして天津日嗣をろしめさせたまふ天皇の皇后の
はしめ又婚ははしめと大山津見神深く心せさせて其の御子の御壽は

雨よも風にもさへりなく石の如くとしへにたのすべく又御榮は木
花のさうゆる如く榮まさむと誓ひて奉れるとあなかしこ還々藝命そ
の心をたゆしもたまひぬより天津神のふとまにうらへたまへるば
かりの大禮をもちてすれさせたまひけむ大御心のまにく麗美を
とめたまひ凶醜をふり捨てたまへる自然の事にあはるべけれと天津
神の御子に御壽長くたごしまさす世の人草れ壽命もそれに背て短か
くなりぬるはいみじき事のかぎりなりけりかゝる尊き御傳のあるは
國といふ國のもとの國なればかたじけなしともかたじけなくいとも
うれしき事になむ此祖國よ生れたらむ人は心あらむも心なきも深く
古傳へをねもひて外國よなゝらひそ
麗美や凶醜やにかゝるべきにあらすよ子を
うさせたまひしき妻なれば心正しく心うつしき
を撰てこそつべきをかけまくもかしこき天皇すら大御心のまに凶醜をすて麗美をめでさせて婚
ごじめさせられたばあやまちやすかるべしされば男女の中にて國を偲るばし家をうしなひ命をさへな
さるのにせる人たちこゝらあるめりかの天神の御卜とひの御心を深くも深くもひ奉るべき事ぞ守
村若き時と思ひて今くいのやちたびくもれどもかひなければだくしくもなむふりたてゝさく耳

もあり二神反降たまひて天の御柱とさきの如くもさめぐり男神よりこ
とさきだちみあひまゝして淡道の移の狭別島をこじめめて大八島國う
みたまひそれより小嶋くをも生たまふに隨ひて國土と海水と漸に分
る、故よ自然に潮沫の凝堅まり合ひて大國よも小國にもなりさるが
外國ともなりけりこれはた産靈神の産靈よよりてなれるものから二
柱の神の産たまへる國にあらねば卑き國なり大地なしをへたまひて
神たちをうみたまひ伊邪那美神の火神を生ませるによりて遂神避也
と傳へてあり本居翁のいへらく御魂の御身を去こと、思ふは誤あり
といへりいふかし葬、出雲國與伯伎國堺比婆之山也と傳へてあり思
ふに御魂の去りたまへる御身ならで何とかくしまつれるよりかゝる
所より平田翁の鎮火祭の祝詞にすがられて火を産たまへるいみじき
御有狀を扶神の見そあはしたまへることを恥おもはむ其後は扶神に

相見たまひじとあはし決めてその現御身ながらに妹神の御許を離れ
坐るよこそわれといへり鎮火祭の祝詞よよればうべなれと古事記日
本紀とはことにて祝詞なればかへりもあるべし神に申すには忌詞守村は學
問も高からず考へもみじかければ平田翁の説にまたがひをるべきな
れと目をとちて考へ見るよ現御身ながらに往ませりとせば妹神の見たまへる御身の有状
産靈神の産靈によりてみ身になりあまれる處ありあはざる處ましま
すよりさしふたきて生そめたまへれば神たちのみか生死ある人の祖
にまして大地を此世をもつくりたまへりまかれれば此二柱の大神生と
死とも持分たまひて何神かこじめたまふべきとぞおもひ奉らるゝ生
は樂しき世死るゝかなしき世天地の節の中なる大地伊邪那岐命詔之愛我那爾妹命
よある處にて自然に産靈ノ神たちもまか産靈けむ平瀨易子之一木平乃旬旬御枕方旬旬御足方而哭時於御涙所成神坐香
山之畝尾木本名泣澤女神云々と傳へて實かなしき世ればじめなれば

かゝりけむくしこは古事記日本紀にも伊弉諾尊恨之曰唯以二見替我
愛之妹者一平則旬旬頭邊旬旬脚邊而哭泣涕焉其淚墮而爲神是
即畝丘樹下所居之神號啼澤女命矣とありかゝればこそ根國底國まで
慕ひかこしけめかし柿本朝臣人麻呂妻の死後作歌万葉うつ蟬とおもひし時云々吾妹子が
もの腋挟もち吾妹子とふたり吾ねし枕つく嬌屋のうちに晝はもうら不樂くらし夜もいさ衝あかし
なげいどもせむすべまらよこふれどもあふよしをなみ大鳥の羽易け山よ吾こふる妹はいますと人の
いへば石根さくきてなづみかく非傷世をつくらまゝ祖神にかひしませば一柱
はかならず神あがりたまふべき事まなひさるを鎮火祭の祝詞の石隠
給てをか三柱の神の隠御身又隠八十限手而侍焉とあなし事に
見むいかよぞやよしや現し御身ながら下津國にかひしましたりと
も大地の下よりくれさせてうき世をつくらまゝ祖神とこそ申すべけ
れ日本紀にも伊弉冉尊生火神時被灼而神退去矣故葬於紀伊國熊野
之有馬村焉とあり此傳へをも古事記のをもより捨て鎮火祭の祝詞よ

ひたすがりやすがりて考へ得たりと誇らるゝより天説辨々火祭の詞なる
説ぞと云ふことの子が始めて言出たる説なれば不審思ふ人も有べけれ此の古史微の首巻委く辨
へたるを見るへし然れば予が此説を聞ざるは是は記記誤りをうけて伊邪那美神を崩坐ると思へ
むも然る事ながらかく聞てもなほ其説を張たらむは神の御言を偽りと爲るなれば一遺は向ふべ
く思ひ定めて云ふべきものぞと云へれ守村の祝詞なれば崩坐を石隠給てと傳へさせたりと見てよか
るべしとぞ思ふ猶いひ同翁のいへらく伊邪那岐伊邪那美命二柱の中に一柱も死坐しなばこの天地
の豈一日もかくて有らめやといへり何てふ事ぞや伊邪那岐伊邪那美命の天をつくれりといふ古傳何
といふ書籍ありやわれいしらす先の天地の高御産靈神のつくり給へるものぞこの天地の節のなか
よ漂在物を天神のみこととて修理固成し給ふにつけて先淤能基呂嶋なり此嶋に八尋殿をみたて
世をこじめ給ひみこ生つて修理固たまへればこれ大地も死ぬといふ事なかるべしや二柱の神のうち
一柱はかならず死坐すぞうべなりけるうしけれと兼てもいへる如く伊邪那美命の悪氣のまじ凝り
てあれましためれば女にればしつゝ慎みなく男よことさきだちたまへるよりたのづから大地の下邊
よかくれさせ黄泉津大神となりたまひて凶惡のねこる穢き國を去らしめて死ぬる氣をつかさどり
たまふなりけり本居翁に繼て平田翁もうれしき學者と毎朝よをろがむものから一道にむかひむか
ひむとれもひ定てなむ此は三本國考を見むと本宅の藏よもさてこれやかれやと書箱さがしつれ
と見あたらねば目をとちてたれにかしけむと考へ見るをりしも物のねちたる言せりかどろさてそ
なたを見れば書箱の蓋なりこの箱に入てあらば翁が鎮火祭の祝詞にすがりたる説いひ破れとの事な
らむとうち見ればありけりさればなめげもはかりもなくなむ古事記日本紀のみ傳へよるをよき
ついでにいひ本居翁のいへらく貴きも賤きも善きも惡きも死ぬればみな此夜見國に往ことぞと

いへれどしたかひがたしなきからここの地の下よかくせ善事せる人の魂は神のみつかへしめにな
るもあるべし又神と祭らるゝもあるべし又墓のあたりにあそひをるもあるべし又神やらひもやらの
れて穢き黄泉もくもあるべし守村の定ていひがたしなのが云
ゝ氣を疑したらむ氣によりて魂のゆくへあるべしとぞれもふ 死ぬる世をば何神のつく
りけむといふ説もうちむすれ又黄泉ひら坂に千引石を引さへて其石
置中各對立而度事戸之時伊邪那美命言 我那勢命爲如此者汝國
之人草一日殺殺千頭爾伊邪那岐命詔 我那爾妹命汝爲然者吾一日
立千五百産屋かくのりたまへる二神の御詞よ生と死とをわけもちた
まふ事あきらなりなるをも然は考へざりけむ伊邪那岐命は上ッ國を去
らしめて生る方をつかさどりたまふからにこゝにて大神とならせ
たまひ伊邪那美命は下ッ國を去らしめて死る方をつかさどりたま
ふからよこゝにて黄津大神とならせたまへり 古事記正しけれ 又按ふに泉
津戸よ道反之大神引塞久那斗神突立て彼國より此國の往還を止め給
へばこゝよて黄泉國されはなれて月となれるにこそかくいふ伊邪

那岐、大神兼てきればなれて月となるをまろしめせば御身を滌きて右の御目よあれませる月讀命に夜の食國とまらせと事依たまへるなりけり此はいまだ人の夢にもれもひよらぬ事なればいふかゝりもあらむさる人の心を平らうにしてきけ黄泉國きればなれて月とならぬに月讀とね得せて夜の食國とまらせと事依たまふべきかよくてもふべし月讀の御名の義と加茂翁の美は持にて偕夜見國と大地の下方に凝りなりて伊邪那岐命の御妻神を追往ませる時に聞かりければ夜見國といへるなるべしかく夜見國といふより天地泉のさた出たれと平田翁すら泉と地の根元なりといふねば高御産靈神のつくらまゝ地のかくれはてたりこの地死ればなれて今見あくる月となればむかしより天のものともひ來よければ日の天なる事も本居翁の先まされる人なかりけり産靈神の神はうりみはうりもてつくらまゝ天にもえあがる氣の凝り

なれる日にてすみほきらけき國地は垂くだる氣の凝りなれる月にて萬の穢きもの、行留る國此すみあきらけき日と晝の大地を照させ穢もの、行留る月に夜の大地を潤させ此二節にて大地の物皆千世万世さうえもくべくつくりたまへる故に伊邪那岐命の貴子天照大御神に高天原をまらせ月讀命に夜の食國をまらせと事依たまへりかゝれば日なくば月なくばいづれもせむその月穢きもの、行とまると夜見國にて禍氣惡氣のおこり來る所といへばいまいしく思ふ人おほゆるべけれどそれいふもひばかりなき尿の穢き物のかぎりなりされど肥よこの物の上またつ物いなし此尿を肥にせる梨のあまみことにてあちひいとよし甜瓜もまうなりこれもて産靈神の氣産びのくしびなる事人のさとりもてまらすべきよあらじとれもへ月讀命のまろしめす月をもいと尊しとばらへしつゝをろがみなば惡事の吉事と變るさきいへわ

りぬべしかし本居翁の月讀命と須佐之男命とは一ツ神のどおもはる
事多しと疑れたるより平田翁は月讀命は亦御名須佐之男命とせり
いりよぞや月讀命に父神のまらせと事依したまへる夜、食國のされは
なれて月となれる國よて根之堅洲國なり亦御名須佐之男命の妣國よまからむ
と哭たまふをいたく怒して此國にはなすみとと神やらひよやらひた
まふべき事やある神代紀の一番保食の神の所なる月讀命は須佐之
男神の紛れなりと見たらむにいやそらまし守村が疲考へには月讀
命に之月をまらせ夜、食國須佐之男命よ天の下をまらせ海原とのりたま
へるなるべければ月讀命須佐之男命一神にのゐらで二神なるべし須
佐之男命は御鼻を洗ひ給ふ時生ませれば本居翁のいへらく鼻に噴惡氣
の深くて其なごり亡がたき故に惡神なりといへるうべなり實に御鼻
に穢の氣のこりてなりませるからよ父神の事依しをよそにして妣國

を慕ひなき又惡行もあしたまへるなるべし此御鼻を洗ふ時にこの傳
へよてよく考ふべき事ぞ諸別天神の誕りなりたまへる五氣に天なり
これと連れて地なり此五氣くすしく妙なれば物みなよこのなごりあ
り又天地の二節の中に漂よへる大地れかたまりはじめに男女の嫁の
法見延大地なりをへよいたりて生死の界もあり又接ふにむしも延の
天の日これと對ふ地は月あを見延の天の天空これに對ふ地は大地を
れもゆるまか心得て見れば万葉集七詠天天海丹雲之波立同集六天
座月讀壯子同集十天海月船津又祝詞にも天地日月止共爾とあるいつ
れも天は天空とまらる高天原天安河天降坐の天は日とおもはるこは
いかどちでいふなりこのいよしへ傳へよよめばよむまにこはおもへばおもふ
まに今こはの現よむかしを見るが如し天の下廣しといへどかゝる傳
へのいづくにかあるべき必あらむ人の先古事記をよくよみ次に日本

紀それより祝詞万葉集をもよむべし自然よそれ詞その辞のくすかくて古今後
撰拾遺集をも見て歌をよむぞよめるべしあるか守村の祝詞よりも神の
ふそのかてものにいにしへ人のいのかりけむの源氏物語をも時世よて
いれつ、も若菜、下よことくしよこまもろこしのがくよりあづまわそびの耳なれたるはなつかに
くかもしるくどか、れたりこ、に紫式部の心にはほひの借に見えてもかじともかじ人情ともとよ
りみて文章けうるいしよ、醫書よよまむには大已貴命少彦名命は療病をさす
禁厭の法を定めたまひて是根元なればかれ典藥頭長康丹波氏は醫方
の我邦よ在こと神世よりとす神國の民他邦の藥を服して尙ぞ其志に
應せむや稟氣の餅ひり其土人その土宜を服す功なくばあるべからず
といへるを心得て神遺方偽書といふ先よみこゝのとあらば斷をよなりた
る古本なりとも見又古老の物語の藥ならむよはをうじくも耳に入れ
又禁厭ならむをも聞漏す事なくた感えたくべしわれたすかる事また
人をすくふ事もあり神がら國がらにていみじうかたじけなし大事よ

れもふべき事ぞ大已貴少彦名の二柱の神のわたりまゝて漢國の毒民
せもよも教へさせたまへればそれ傳へ古書には殘りてあめればこゝ
のかてもれによむべしうまみある事ねほし醫を去らぬ我いさされど後の
はよからじ我國にてハ死體シカラハ疵ヒつくる事をも大祝オホウラに死處斷シツと罪にし
てあれば死體切さきて見る穢ケガレし事ハなかりけむさるを此頃ハ我國
にてもさる穢さきして醫道走りたりげに鼻のあたりをこめかして
ひゝらき居る醫師もありとさくいとれかし生居ると死たるとは差別
あるもれをわが瘦考へには顔色眼中口息脈爪尿管の七處に目を心を
とゞめたらむハ病症又生死も大かたよはえられぬべしとぞれもふ
この七處にてありさま見えぬ醫師たらむに之府分していかに委しく
ありてもかひはあらじかし此は倉賀野驛にて羽鳥氏のこゝるし禁厭くれよといふ
さしてやらむといふいなかふり候へど強ていふよまかせて背より胸よはる病をさうけ候のみ
か足の筋つまり候て立居心にまかせずとさく恐るべしといひつ、まじなひやりぬ近頃ハかゝる醫

師こゝらありげなり心用るべき事ぞわれ岩鼻縣社寺掛勤め居る時風邪よて役所ひきければ病院よ
人をやるやかて若き醫師來て脈を見てめづらしき脈を窺ふものかなとて手とれし載て藥用ゐたもふ
にれよばす今夜ふしたまへばあすよよしといふさりとて三服もらひたれし醫師のいへる如くな
りけり此醫師ハ武藏國秩父の人と今はいけりばかりよき醫師になれるにかかくこそあらまほしけ
れ我友長野見意はき人廿五服用むて功なければ見たてたがへりとして藥易も心得べしとまにが
くれざりけり是もよき心得といふべし藥賣の醫師にきりせまやしくして
元祖 八卦にてふれり 筮の五十ハ片羽にて五ノ一著 漢籍よまひよハ本居翁の歌よ
底にざるからふみ川はとこなめのかしこき川を足ふひなめ

とよまれたりよくおもふべし四海の祖國なれば備れれこりも見ゆ其
のいにしへ傳へに神皇產靈尊の少名毘古那神を最悪く教養に願はずと
ありこれ教養のはじめなれば儒のれこりとぞ思ふ此少名毘古那命ハ
天上にり外國より降りまし外國より此國へ渡り來りまし後に常世國へ
渡りませれば本居翁のさひづるや常世のうらの八十國ハ少名毘古那
ぞつくらせりけむとうたひれきたる聲をえるべよ平田翁れふかく尋
ねて玄學の古書どもに泰一小子東海王清華小童君青真小童君ぞ見

ゆるは少名毘古那神と考へられたり此はみれや神の教養に願はざる
のわろかりきとればいつきたまひてから國の蠢民どもも善惡をときた
しへたまへるが儒道のはじめて世々をふるまへにさかしらよ枝に
枝をそへ花よ花をつけ飾に飾りて實なき事になりぬるハ善事の惡事
をいつけるなりけりいでや儒のあしき事をはかりもなく一いひあら
はさむ掛卷もかゝりければ應神天皇の百濟國に賢人ありやと仰せられた
まひて和爾吉師を買上せたり此王仁を師と爲させて菟道稚郎子の太
子諸典籍を習ひたもふに通達さる事なきよいたりたまへりとさる故
に儒者心にならせたまひて父命の天津日繼を知らせと詔たまへるを
よそになしたまひ表を飾て兄大雀命を重みして各讓たまひつ、海
人が貢る大贊兄辭婆弟も辭み往還又疲て泣たりといとをかかし父と兄
とにいかに大みことにそむかず先天津日繼しらしして後兄に又大雀の命

も父の大みことにしたがりひその上まひてなら婆我に譲れとのたまひてよからましを漢學を盛りになさむの時なれ婆かせくしくていともあさまき事ありきされ婆太子はみづから死りたまひぬ備道は赤き心を黒くもなすからに皇神たちのにくませていみまきしるしをどく見せたまへるなめりかしさるを今に漢學の廢ぬ悪神のさはへたすくるのみかこ、の古傳を見ぬ清盲人の多き故なるべし 太雀、命よ父、命の日向、國より喚上たまへる髪長比賣を難波津にてみそなはして建内、宿禰、大臣に父、命に申して吾にたまひしめよと大臣、父、命に請即御子よたまへり此は父、命のみ心も御子のみ心も拜ばかり異事なりけり大雀、命そのみ心漢學もゑに失たまひて大殿破壊れて悉くは雨漏れども修理たまはず械をもてその雨をうけ漏ざる處に遷避たまへりとの聖帝めかしたまいて何てふ事ぞやよしや王仁が然作りたりとも其文章傳へ殘したまへるの表を飾る漢心に變たまへるなりまして御弟

速總別王を媒として庶妹女鳥王をこひたまひつれど女鳥王速總別王に汝命の妻よならむと相婚まして後速總別王にひばりはあめよかけるとかゆくやとやぶさわけさゝきとらさねとうたひたるをさこしめし軍を興して弟王弟妹共に殺たまひき女鳥王の歌よからねと父、命のめさせたる髪長比賣を建内、大臣もてこひ申え、時のみ心又父、命のみ心のどよめくみたまひしをかへり見したまひにはみ腹たゝせたまふとも殺してよかるべしや是唐戎風をまねたまひしけよや不孝其罪よや武烈天皇よて御筋極させたまへり

かそるべし、かくいそ子孫永久は人の力の及ぶ所にあらず漢學をいひおとしめむとて論ふのわなをうしど笑ふ人もあるべしそれの深く考へざるなりかの鎌足公の入鹿を誅したまひしはよけれご其後朝政を變改しによりて皇朝の古風を失ひて永世の不忠臣とも申すべしといへる人もあり鎌足公之天兒屋根、命の御末なから神祇伯を辞てつかへまつらす漢人と呼名つくばり漢好より惡氣つきて天智天皇の愛たまへる鏡、女王に娉て女王よ玉くしけ覆をやすみあけていなば君が名はあれと吾名し惜しもとわびられたり佛好にもなりければ孫娘光明皇后と聖武天皇の后にまーッ、釋、玄昉よ娉

一休諸國物語に
和尙ある川へをど
はりたまへる時に
女の裸体にて居
るを見たまひて陰
門を目ざして三度
禮拜してすきける
と見ゆ實後小松
帝の御落胤にて應
永元年甲戌正月朔

てこの僧の子を生めり御筋こそ延兼ていへる如く教養は神皇産靈尊のこじめ
ねいみじうあさましき事にあらすや
たまひて御子少名毘古那神の漢國に渡りて蠢民をも教養せさせた
るが根元なれば善事なれば善事すぎて惡事になりてたるなり唐戎
國は人の心直からねば大どらならずしてまがりくねりたる教へが理
よ入やすかめればおのがまゝ作りまうけておもてを飾る空言よなり
て實なき凶事となれるなりけり漢學はよからぬ事之加茂本居平田の
翁たち又心ある先哲も説てあればうくいふべきよもあらねど四海の
祖國よて教養の根さしもこゝに見ゆればそれをまらせまほしくて諸
又佛道の惡道なる事は出家にありつゝも一休和尙の歌に

釋迦といふいたづらものが世に出ておぼくれ人をまよへしにけり

とよませたるにてとり出て論べきにもあらねど此釋迦の本願をその
子羅睺羅と僧よなしたるより接ふに世の人みなをその道よ導ひ入て

日出時に生れさ
せためれば天御祖
神の子孫をさか延
させむとつくらせ
たまへる久保を尊
き善者とおぼした
まへるこそ僧な
れど尊むべき人な
りかくいふを心し
てさけ

わが叔母買子早く
夫にわのれけりそ
の死體よ湯あみす
る時に腰より下
いたれにも手つけ
させすあらひをへ
て男莖をまもりて
泪一甲こぼされた
りれもへば心の眞
玉也けり今よりさ
か延えめむ子待か
たけれはぞ
一休和尙にて思ひ
いでければ我若き時

不姪戒を持しめて人種をからし盡さむの惡道をつくらむとせるなり
けり然かもひとりて考ふるに伊邪那美命の人草一日絞殺千頭と申た
まへる凝りの氣いとも惡しき國なるからに天竺の淨飯王の子悉達と生
れて人草をからしつくさむとせるあらむとせる時は佛の根さしもこ
ゝなるべしうくいふはいまだ我のみなればあやしと思ふ人もあらむ
さる人は伊邪那岐命の黄泉國よ伊邪那美命を追いたりて相ひ見たま
へる時は御姿かへらざりけるが一火ともしてみそなひすをりは御頭
をとしめにて八雷神なりをりて見れどろかせて逃還させり是れをも
て魔道は黄泉國がもとにてその傳へ祖國なればこゝに残れり
妖魔の事思ひいづれば今昔物語なる天狗燒亂語のくたりを取約ていふ金剛山に行ひ住ける聖人の御
門の御妃に愛欲の心を發し我死て鬼と成て后に睦奉らむと物食のす餓死して忽鬼となり后のおとし
ます喬に來て懐きけるよ后さちゑたまひ御帳の内よ入れ鬼と臥させたまひぬこれ三寶の驗なり人
々の目に之鬼と見えつゝも后は美し
此佛道よ欽明天皇十三年百濟王より釋迦佛

身もちあしかぞけ
れば瘡といふあし
き病まうけたり前
妻雪子祖父母
はなれてふせとさ
をれたれと夫の
ううつりてこの身
見よくひらきえ
むも何のふへき
とてそひ寝せり老
てもわすれかたけ
れ之女の心得よと

の像を奉る天皇は非たまひず蘇我稻目よたまひるその子馬子聖徳太子
子ともに尊みて佛法を興せり此稻目が血統は入鹿にて絶延聖徳太子
のは入鹿の爲に子弟妃妾もろとも自死て絶延にけり皇神たちのいま
くしくはほしてきためて見せたまへるなるべしさるをこゝに心を
めす今ふ佛を尊む人のねはうるはまをひ居て悪魔より観音まわり不動ま
あひまじこりその氣にて子をつくる故なるべし心あらむ人は深くれ
もふべき事ども神たちのいたく佛道をよくませたまふめるは天皇
祖神の天地をつくらせたまひかの二神をなしましその神たちに子孫
生々ぬべき陰具をつけ嫁の法もトとひてをしへ大地をうませて人種
とさかえまめむの大御心それにとひきてその人種たやさばやとその
陰具と魔羅悪者又嫁を不浄行なと卑むれば然あるべき事なりかし
今の現に我あたりを尋ね見るよ大般若經をかきて寺
に納めたる家い大かた血統たえてありれとるべし かれば魔羅善者と大事にかも

工藤武雄の妻とく
れ中と湯水もて久保
らふ道具今ハ傳り
用ひてよしやと久
保ハ大事の所なれ
ば老もてあそび
ものにつくべきに
らす外國人やさる
ものつくりけむと
いへる事あればこ
いよ

ひ佛者悪魔と心得べき事どまして女は佛者悪魔に近よるべうらす魔
羅善者久保なればかけまくもかしこき后にそら僧の子をまうけたる
あり又佛者悪魔の大きやかなるをもたるをめでさせたる女帝もあり
久保を大事なれほさざるより大地の海とならむかきりは悪名あがし
たまへり是佛者悪魔を近づけたまへる故なりけりこは先哲たちもい
ひてあれど黄泉國が悪魔の根元と考へ得たるにつきてなむかくて猶おもふに鎮
火祭によりて平田翁の如く伊邪那美命は現御身ながらよ黄泉國よ往ま
せりと見れば火を産たまへる御有状をのみ恥ねばして天神たちのた
まへる國をつくり固なせれ大詔を捨てたまひて忠臣ならねば自
神やらひよやらはれて穢國に往まして悪魔の根元の大神とならせた
まへりとや申さむ 火をうませたまふも夫神のをさしふたきまひてなるべしさるをその
夫のそのさまみそなはしたりとて恥て下ッ國よもかせたまへりと申さむ
はいかよぞやかの豊玉毘賣命は兼て夫に本國の形になりてうまひな見たまひそと申せるを八尋鱈よ

ならせたまへるをのみとなつたまへれば恥たまひ海城を塞て返せりされば伊邪那美命とはことよ
 てさる事とぞれもひ奉らるゝついでよいはむ和泉式部願ありて貴船神さまうで、巫のをしへの如く
 前かき開かねてちとやふる神の見るめも恥うや身をれもふとて身をやすつべきとよめり此の陰具
 善者を大事に思へりときこれを釋、道命と陸て一車にてものへ行けるに道命うしろむきて居たり
 ければ和泉式部などかくは居たるぞといへる事あり歌よくよめれば心なき人にもあらざるべけれ
 和泉式部もかくは佛者悪魔に陸べる故まことの恥といふ字をすればはてたるなめりおもてをうざる
 女の大かたかくありけり男もおもてをかざりかこまりて見するにあやし我里よきよといふ女あり
 て物見又夜遊もすきけれと心もきよにてさらし濁る事なかりき此、さよ女七月七日の事ありき甘樂川
 のむかひに若もれども水あむとてなみ居たるよ黒き毛のあらに見おはがりまくりあげてわたる若
 ものども河原よ伏て覗くわたりはて、われらわが大事のかくし處見まはしけなり近よりてふじをが
 めとふみひろがりければ若ものどもれどろきにげちりけりとき、ぬ天宇受賣命よならへりときやは
 ひ女にても心のをしくあらまはしきものを猶いはひ此、きよ女の隣に大須賀菊次といへる若人あり
 とけりわが弟子よて神の説を蔑見むの心わりある時机のもとに來ていがて師うけたまひらまはし
 天地に繼て万物のはじめ此、上もなく尊じとともすればのたまふ陰具の毛のいかよかとふされば必
 めたるにのあらねど一本生ひたるの男毛二本の女毛陰具の毛にさへ男女ある事かと思ひたりとい
 へばさにあらずとさうふるさなくのあらざるをしへよといへばいとも尊き所の毛なりうしてまりて
 とあるからし机をかたよせ手をつき首をさけてこへばことまらぬ弟子が物まりの師にをしへまうす
 けられし陰具のよき毛をぬきてかしてけれと日よ向より見たまへ三角なりといふかたはけなしわ
 れ外の毛のいふなりそれたがひたらむよわが説蔑しわらへたがすわわれにまたかへといへば

火をうみたまひて
 穢ましければトイ
 ヘルハイカと尋枝
 咎めければトイ
 て考ふるにトイ
 へるよて經水も此
 時よりとねもひや
 りてとよく考へて
 よといへりきこの
 尋枝の田島氏よて
 高崎人なり我岩鼻
 縣よ居し時弟子よ
 してよといへるに
 かふりふりければ
 などとさくされ
 ば鱧屋にありッ、
 書籍れみ見て居て
 母にもものせさす
 きけり家業よれこ
 たる人のいへば
 其のあしといへる
 なりけり

うけたまひぬといふからに天窓の丸かるべし腋の之四角ならむといへばうち蓋きて一をさき二
 をまらたまへば何もくうまきとりたまふらむ今より疑ひまうさすかしてさるよりて机のも
 とたる日記をとうで、表にまらしおける○△口を見せかく心もちるせむと思ひをるぞかの越王勾
 踐醫と學ひ泄便の味をまら呉王夫差のを嘗め病を愈したればこそ捕ハれをゆるされけれわれ○△口
 に心とめめざらましかばそこになく一口よいひおとまめられわらなまじをといへる事ありきこ
 れより學問せむにのいよ、ますく心れくべき事とぞれもひなりぬるをしきかな此、菊次若死せりい
 き居たらば今は老が一方ともなりぬべいとれもへば袖に露れくこの事を武藏國男食郡立原村の弟子
 なる柏原兵吾がさして實ままかるにかとためし見ていつはりはなかりけりといへり大地より先にな
 りくとなりあまれるなりくありあひざるを見えとめて
 しこそ所なれば毛もかゝるよこそ心あふむも心なきもよく思へ 又接ふに今も月のさなり
 を穢れといふよりおして考ふるに火をうみたまひて穢ましければ自
 然神やらひよて神遊まして黄泉國にいたりてこの大神となりたま
 へるなめりとも申すべさかどまれかくまれ産靈神のみ 伊邪那岐の命は黄泉
 國の惡魔をいたく嫌まして逃かへりまして黄泉平坂に千引石を引塞
 たまひて道反大神を又御杖を投棄たまひて久那斗神をなしたまへり
 此は伊邪那岐大神の惡魔をいみじういひませる大氣の凝りたまへる皇神たちにおはしませば
 かしこしともかしこし其は大穴牟遲神を追て黄泉平坂より逃り望して建須佐之男神の呼び

われふろかま侍れ
ば職人使ひがたし
骨折たる事見せ申
さむとひ來たまへ
らひ行たるに天秤
のうへにて見事に
鱧をさきて見せけ
り驚きつゝかくて
は學問にもどて弟
子にせり今名高
き隨屋にて漢或の
詞もよく去り辞も
よく心得漢の音韻
まさへこゝろをや
る人となれりけれ
ばそのよし筆のつ
いでよ人は生業を
大事にしていとま
のひまよ心がくれ
ばよき學者にもな
らるゝぞよ

かけてもの申玉へるよてもたもふべし八百方千万と神のたのしませせ悪魔を皇國に入れじと守りた
もふ此の三神の皇神なむされといつぎ祭てかうくと申さすまもらざるべしたとへば扇もいた
らせば暑氣も風となるなり是よてたもへ 此魔神たちは天照大御神の兄神よ
ればしすすをたれもまらせなりぬるのいともくなげかしき事ぞ
ついでに猶いはむ守村之加茂本居平田の三翁たちの袋を負て從者もなりがたければいかで齡はかり
の上にとむと神たちこひのみつゝ悪魔の氣よいあひまじこらじと寺のわたり墓所のあたり心
してふきはらひて行かひし又東は善氣を朝の吞み又神よまらればふしをろがみながら御前の氣と
いたゞけりさる故にか翁たちの齡の上にてたれり又若狭國小濱妙玄寺義門大徳のみもと我上野國
には問あひすべき人獨もなしいかで弟子になしてたべとき延やりたるかへりごと君貴國の嚙矢
となり玉へ最となり玉へどのたまひたせたるをはじめにて高名にれどろかすその著述を見玉へ誤
りあるもれなり學道横を行す妙にいたり玉へなせねもころのみさとし忘るゝまなくしてこのを命
つぐ米と奪みそのかても漢のをのぞきうまき所こしらへたる味なりけりとおほもばかりにな
りて復古八卦方位辨をあらひし又武藏人肥丹具守がすゝめにて氣象考を諸長壽のうれしさをかゝる
考へもまうげたりされせどり見む人とのちらじとおもへども外の事もありかの方位辨を見て新
居氏の世に用ゐられすともよしこの考への和漢三千年に獨なりといへる人もありとさく又武藏國櫻
澤郡用土村よ岡本勝躬といふ盲人あり畫の鐵道の奥を夜の書籍の奥をいかでと見けるしみ二十
五歳にて盲よなれりとか此人氣象考を見てうちつひは恵まれすれどけりかへし心よ見てよ國のみ
實とよみて弟子にしてよいかでといひおこせたりよくあぢはひたりとおもふあまりにきうけやり

此歌ヲ思ヒイッレ
ハ平田翁ノ説ハ採
ルカ足ヲ考ヘ
見れば天武天皇の
御陵の事と此朝臣
のかみさぶと盤隠
座とよみてあり翁
の説よ感されて心
をくらしめたる事
のくやしとれも
るればこゝよ

たり盲人にすらかゝるもあれば盲人墨栗粒いく升 この皇大八島國の國といふ國
なるべけれをたまゝのとり見む人もあらむとて
いふ島の根元にて天地初發の時より正しき傳のあれと別天神五
柱の皇神たちの神といふ神物といふ物の根元その五氣の尊き事をい
まだ考へたる人のなけれは天地すら大かたの説それなげりしくいに
しへを好むあまりに此度四海祖國考と題け述て作れりうしこき神を
も人をもつゝみりざる事なく論ひ又先哲の説をもいひ破りなせせれ
ばなめしよくしとおもふ學者もこゝらありなむよく見よくよみこれ
瘦考へそ何事ぞとゆるす事なく老が瘦骨うちらうち碎てたべうれし
からまし今や今もまられぬ齡なればいさあるうちにかでく
筆のついでに

我國のむかしをこひて惡神にきためられむは何かいとはむ
天の下廣くはわれどわが國のむかし傳へにまゝものぞなき

書添

工藤武雄の古傳を尋みをりくためさせたる事もありてよませたるなれば人の心得人の爲よ
なりぬべければ尻に坐るしたまへとす、ひげにく心ありておこきふ人のあらむに之たすく
る事にもいたりなむおもひて

塞神三柱の皇神たちをいつき奉らば虎例刺といふや、病も必た延ぬべし並村さうひ門邊
よものしなば傳染なかるべしと思ふ事をもよめる

ちはやふる神のうまき、わが國は上つ國なりまはなわのこりてなりぬるよそ國と下つ國なりその國
は根の國のべにその國は底つ國べに遠からぬ國にあらばあらび來むそのまがもの、うとび來むそ
のまがの氣の年毎にあらふるもうべ年毎に人死ぬもうべ上つ國わが國べよも此頃は下つ國より物か
へよ千船百船人さへよわたりし來ればそのまがもの船よのりそひその氣の人よそひ來て天皇のめ
く、おもひ得す人草よからす事あらまかりとて外つ國人のおそる、にちちなまきびそちまきひあら
ぬ事すなかけまよもあやまかしくいはまよもあやに、しき皇國は皇神たちの神はかり後の世に
得しかたりつきいひつがひ來て正しくもつたへてあればから船のよせし浦々から人の來む國さかひ郡
々里の入口家々の門べく、よ八衢比古八衢比賣久那斗と御名を申して塞神いつきまつらばこの神の
壘村の如さや、りま、下より、か、下をまより上より、う、ば上をまより夜のまより日のと守、よまより
まじさきはへまして白露のきゆるが如く白雪の跡なき如くかならずやうせはてぬべしこのまつりか
こなひむに、瓦屋の香にまじこるなまじこらばまつるかひあらじちはやふる神のまま、我國に生
れ一人は神つたへねはになれもひそ神つたへねはにねもひてまがものをはひこらそなそのものに人
をころすな伊邪那岐の神の命のまがものよ、か、れし時によもつ神れひ來し時に引さへ、千引石にな
げうてしそれのみ杖よなりませるくしびの神ぞくしびにもかしく神ぞみつたへをいた、きもちて
ことさらよまつりまつらば安國のやすくぞばらまじやすくぞわるべき

手を折て出入毎よふきはらへ、つ、の數はいとも尊し

こは家を出つる時門べよて親指よりヒンミヨイを小指まで折か、めひらきあがら外へふきは
らふべし一度にてもよけれと三度ぞよきかへり來て又外へよて外へ息つよくふきはらふべし
町村さうひよてくれこなふもよしはやり病ある町村へ入らむはそれ町村さかひにてその
方へふきはらふべしかくてかへる時その方へふきはらふべし病人の家よ入らむにもその門
べにてその方へふき入れかへる時よまかすべしこのまじなひを教への通りれこなひたる人に
虎例刺は氣をうけたるはなしかばより五本の指のくすしき事の上にいへるが如くあらばなり
但男の左手女の右手このまじまひのなじやすければわらべにもをこふべし

一ツタ見テ目ニカ、リケレハ

二丁	ウ頭	ツカニニヒ也	三丁	ウ頭	いふかひコニシヌケタリ
四丁	オ	た得へ延也	四丁	ウ	ア◎五丁イノ●エ◎オ◎皆◎也
五丁	オ	言語をメコ也	五丁	ウ	熱ヌチ也
七丁	オ	字言ハ言也	八丁	オ	石ハ右也
八丁	オ	コ五八ハハ也	九丁	オ頭	つくるる也
九丁	オ	答めもコノアマレリ	十丁	ウ	も延ひハアマレリ
十丁	ウ	れしへおと也	十一丁	ウ	曆ハハを也
十三丁	オ	諺コハワ也	十六丁	ウ	御傳へ下ニヌケタリ
十八丁	オ	天上下ニヌケタリ	二十丁	オ	かかしコたを也
二十丁	ウ	天上よりよよ也	廿一丁	オ	ときおしへたを也
廿一丁	ウ	たまいていひ也	廿三丁	ウ頭	さをとれをさ也
廿四丁	オ	夫シハチ也	廿四丁	ウ頭	よとひけらくコよチ也
廿四丁	オ	今ハ傳ハ侍也	廿五丁	ウ	暑さコさき也
廿五丁	オ	心めたる所ニヌケタリ	廿五丁	頭	漢國の詞もコ漢皇也

此書は天地生死を口よはいひながらその根元を正しくまれるハ學者にすら一人もなクめれば
ふとちもひつきて明治十九年六月一日筆をとりめていとまのひま〜考へつゝ我國ハ千万國ハ
本國なれば何の道くれの道もあこる根さしハこゝにあるべしとさとり得てそれ八月廿五日にか
きをへければとく板にゑりて世にあらはし人の答めをとちもひたれと壁のさふ横文字國の事と
まらねば今ハとり用ゐられずといふをきつて 我國ようゑてなましまる人のなくとも海に
いうでいうだをどやうたひて海松の如くくけたる衣着るばかりの老翁なれば書櫃ハ入れ
おきて衣魚といふ虫ばみよせむ外なしとなげくをさく〜娘すゑ子後妻よし子見れらいかにも
し侍らむ先活字板にといふにわけて武藏人茂木泉二内田進柏原兵吾の人たちもちからそへま
うさひいそきてといふによりて田嶋氏よたのみてかく事なりぬひろまりたらむよはとり見てう
ちおほろきかたじけなしとくりかへす人もあるべしとおはゆるうれしさに延さぬ鬚をかき撫つゝ
明治廿三年五月十一日

守村

よの人よ日月をさして天地ををしふばかりにいたりぬるかな
算へて八十三の老人になりぬればかなしけれ也
今よも岩根をまくらにせむかどおもひやられて
目がたまの千世のすみかハあらハせる書の本れ奥にぞありける

明治廿三年五月廿八日印刷
同 年六月廿七日出版

版權
所有

版權
登錄

著者兼
發行人

印刷人

發行所

賣捌所

定價金三拾錢

新居守村
群馬縣上野國北甘樂郡
高瀬村住居

篠原廣吉

同縣西群馬郡高崎町
大字田町六十七番地

成立舎支店
同 所

ひのや

木田るい

群馬縣北甘樂郡富岡町

高井東一

同縣西群馬郡高崎町

